



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」68号
Issue Date	1986-02-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66548
Type	journal
File Information	yuin68.pdf





スラブ研究センターの「基本図書充実計画」とその問題点

スラブ研究センター教授 外 川 継 男

第二次大戦以前のわが国のソ連研究は、文学や演劇といった一部の分野を除けば、政府や軍部と結びついた政策科学の色彩がきわめて濃いものであった。戦前の満鉄調査部や東亜研究所等で行なわれた研究と調査のレベルは、当時の世界各国のソ連研究のなかでも決して低いものではなかったが、大学を中心とする学術的なソ連・東欧研究の伝統はなかった。したがって、敗戦とともにそれまでの研究の蓄積は雲散霧消し、満鉄などの資料も大部分がアメリカ、ソ連、中国に持ち去られた。

わが国でソ連・東欧の研究が本格的に開始されたのは1950年代の後半からであった。北大の法学部附属研究施設として「スラブ研究施設」が設立されたのは1955年のことであるが、このとき図書室の中核となったのは、ロックフェラー財団から寄贈された500点の主に英語文献と、全国の古本屋からかき集めたロシア語文献とであった。この「スラブ研究施設」は1978年に全学共同利用の「スラブ研究センター」に改組されたが、それまで発足以来24年間にわたって、ほぼ年平均1,000冊の図書を購入し、センター設立時には約24,000冊の蔵書を有するにいたった。

* * *

センターが発足するに際して、われわれは文部省に「基本図書充実計画」を申請した。このときわれわれがモデルとしたのは、アメリカのイリノイ大学の「ロシア・東欧研究センター」であった。これは「スラブ研究施設」とほぼ同じところに設立され、毎年平均約12,000冊の図書を購入し、すでにその蔵書数は38万冊に達していた。しかもアメリカにはイリノイ大学規模のソ連・東欧研究機関が六、七カ所ある上に、圧倒的なスラブ関係の蔵書を誇る議会図書館が存在する。これに反し日本には北大以外にソ連東欧関係の研究機関をもつ大学はまったく存在しないことと、国立国会図書館のソ連東欧関係の蔵書が想像を絶するほど貧弱だというのが対照的である。

このとき「スラブ研究センター」が申請した計画は、毎年5千万円、10年間に5億円の予算を投じて、約10万冊の基本図書を充実するというものであった。この計画は北大当局や文部省の理解と支持が得られ、規模こそ四割弱に縮小されたものの、基本的には承認され、セ

ンター設立以後、年平均3千冊以上の基本図書が充実されるようになった。

しかもこのほか北大の図書館には、ソ連・東欧関係の大型コレクションとして、「ヴェルナツキー」、「スヴェーリン」、「エプシュタイン」、「ベルンシュタイン」、「ロシア亡命文学」などの全国のソ連・東欧研究者が目を見張るような素晴らしいコレクションが相ついで購入されてきた。これは文部省が北大のソ連・東欧研究を重視したからであるが、この一環として、「スラブ研究センター」にも、日露・日ソ関係できわめて貴重な「レンセン・コレクション」が入った。

* * *

このようにして、「スラブ研究センター」は設立以来、それまでの約3倍の図書を毎年購入してきた。しかし当然そこには新たな問題が生じてきた。それはこのように施設時代に比べて3倍もの図書を購入しながら、図書職員はまったく増えることなく、依然として1名だけだということである。そこでアルバイトに来てもらって、ということになるが、これが周知のように6カ月間しか認められず、しかも同一人物は二度と雇傭できないことになっている。「スラブ研究センター」の図書は、言語的にも多岐にわたり、分野も人文・社会科学の全分野をカバーしているため、それでなくとも適任者がなかなか得られないのに、まして6カ月間で辞めなければならないアルバイトの人をさがすのは至難のことである。

現在北大文系各部署の図書職員の数と、過去5年間(昭和55~59年度)の年平均購入冊数は以下のものであり、これとスラブ研究センターとの比率をかつこのなかに表示すると以下のようになる。

	図書職員	年平均図書購入冊数	同雑誌を含む
文 学 部	7 人 (7)	10,726 冊 (3.44)	12,276 冊 (3.58)
教 育 学 部	4 人 (4)	4,082 冊 (1.31)	4,954 冊 (1.44)
経 済 学 部	8 人 (8)	6,172 冊 (1.98)	7,318 冊 (2.13)
ス ラ 研	1 人 (1)	3,118 冊 (1)	3,430 冊 (1)

われわれの経験では、6カ月雇傭のアルバイトの人は、専任職員の半分も仕事ができればよい方である。上の表から判断する限り、わずか専任1人のスラブ研究センターには、常時4~5人のアルバイトが居なければならないことがわかる。しかし、たったいま述べたように、6カ月雇傭で、しかも同一人物を二度と採用することができない現状では、たとえ予算面で雇傭をみとめられても、適任者をさがし出して確保することがまったく困難になっているというのが実状である。

かつて「ブラウス研究室」とか「アラブ研究所」と間違えられた北大の「スラブ研究センター」も、年々評価が高まり世に知られるようになった。センターの資料を利用するために来訪する内外の研究者も着々と増加している。いまやこのセンターを名実ともに、ソ連・東欧研究のセンターたらしめるためには、図書室についての抜本的な改革が必要となってきた。

資料紹介

頭痛、肩こり、NEEDS, ADABAS

—— 日経 NEEDS^{注)} の公開にあたって ——

経済学部 嶺 野 幸 子

経済学部では昨年、日経 NEEDS のうち「総合経済ファイル」、「消費統計データ」、「金融データ」、「法人企業統計データ」の磁気テープ4巻を購入した。これらのデータから必要な系列をとり出して、数量経済分析、統計処理などを行うのがその目的である。したがって、ユーザの望む系列を検索するデータベース管理システム (Hokkaido University Economics and Accounting Database. 略して HEAD という名が付けられた) が必要となる。それで昨年7月末、関口助教授、永田助教授、坂谷助手、加藤助手、私でこの管理システムを開発するチームが発足した。大型計算機センターを使つてのシステム設計はもっぱら私の担当となった。この駄文は、はじめてデータベースを扱った者のいささかのグチもふくめた悪戦苦闘の記である。

これらの4巻の磁気テープの中にどれほどのデータが入っているかといえば、系列数が約4万、ひとつの系列は数レコードもつが、レコードの総数が約23万、これは80カラムのカードにして約120万枚、100枚で1cmの厚さとすればなんと120mという膨大な量である。データの構造は、系列コード、系列名、収録年月日等々の後に時系列の数値が並んでいるという配列になっていて、一見単純だが、ADABAS で扱う標準的な仕様ではない。

システム設計に際しては、すぐれたデータベースマネジメントシステム (DBMS) といわれている ADABAS を使うということになった。(全国国公立大学の計算機センターでユーザに ADABAS を開放しているのは北大だけだそうである。)

HEAD 設計にあたって私は次のような方針をたてた。

- (1) 磁気テープのデータをセンターのディスク上のデータセットにコピーする。このデータセットのデータ形式では ADABAS ファイルにのらないから、ADABAS ファイルにあうようなデータセットに作りかえる。
- (2) ADABAS ファイルの必要な定義を行い、ユーザ言語 NATURAL で、(1) で作ったデータセットを ADABAS ファイルにストアする。
- (3) NATURAL で系列のコードをキーとする系列検索用プログラムを作る。この種の構造をもつデータについては、次の(4)を NATURAL で行うことはたいへん難解なので、検索した系列(複数)を一度外部(非 ADABAS)データセットに出力する。
- (4) (3)の外部データセットからデータを読みこみ、ユーザの望む開始年と終了年をキーボード入力して、系列とその時系列データの配列を画面に出力する FORTRAN プログラムを作る。
- (4) 月次データを四半期、年次データに変換したり、平均値を計算する FORTRAN プログラムを作る。
- (5) (4)と(4)のプログラムを(3)の NATURAL プログラムの中で呼び出す。
- (6) (1)~(5)までを最初「消費統計データ」について行い、成功したならば残り3巻の磁気テープについて行う。

(7) ユーザ用コマンドの整備を行う。

もっともこの方針は最初から立ったのではなく、(1)、(2)あたりをウロウロしている間にしだいに固まってきたものである。また当初は(4)、(4')も NATURAL で行う予定だったが、その独特のクセになじめなくて FORTRAN に変更してしまった。

さて、作業を開始したのは10月下旬だが、とりかかってみるとしんどいのなんの、(1)から(5)までの恰好は一応ついたものの、どのステップも一度でうまくいったためしがない。

なじみのはずの FORTRAN プログラムさえ、膨大なデータを相手にストライキをおこしたかのように動いてくれない。はじめのうちは ADABAS というものの正体をなかなかつかめないので、コマンドを入力していても何をしているのかが自分でもよくわからない。もちろんエラーの意味など見当もつかない。加えて NATURAL というユーザ言語は、配列という概念なし、GOTO 文なしなどで、多少複雑なプログラムを書こうとすると、ユーザの頭の論理の転換がせまられるようだが、この転換がまた難題だ。マニュアルを読んでもわからない。(コンピュータのマニュアルとは多くの場合、ある程度慣れている人がわからなくなった時使えるということになっている。)しかし NATURAL には FORTRAN では不可能な美しい入力画面が描けるという魅力があるし、検索機能などはさすが DBMS で非常にすぐれているので、両方の言語の長所をとり入れることにしたわけである。

エラーが続出し、1日中計算機センターで心肝をくだいても解決したのはただひとつなどというのはいいい方で、これは99%できないという結論を出すのに1週間近くかかることもある。ADABAS のユーザはまだ少ないので、経験の蓄積も少ないからである。こんな状態だから、少しでもうまくいくとうれしくなって長時間 VDT の前をはなれられなくなり、その結果頭はズキズキ、肩はゴリゴリ、目はショボショボという VDT 症候群が慢性化するはめになった。あとどれだけの山を越えなければならないのかわからないが、3月末には完成させ、4月には公開の予定である。

(昭和61年1月7日)

注) NEEDS: Nikkei Economic Electronic Databank System. —— 昭和45年9月に発足した日本経済新聞社の総合経済データバンク・システムの総称で、マクロ経済統計からミクロ経済データまで、経済、産業、地域、マーケティング、海外など広汎な領域をカバーする日本最大の経済データバンクである。

電算機器の搬入、設置作業始まる

「北海道大学図書館オンラインシステム」の稼働を目前にして、3月からのテスト開始、4月からの一部業務の電算化実施を前に、いよいよ1月6日から日本電気 ACOS 610 システムの本体機器をトップに、機器の搬入、設置等の作業が開始された。

本体の設置、接続テスト等は順調に行われ、以後順次各部局に設置される端末機器の搬入、設置、接続テスト等が行われるが、全学20数箇所、100台の端末を分散設置するため、作業は2月末まで続けられる予定である。

北海道大学図書館オンラインシステム所在情報 管理システム（閲覧業務）の概要

北海道大学図書館システム設計実施部会

所在情報管理システムでは図書館の利用の仕方に直接かかわることを多く扱います。図書館がどのように変わり、どれくらい便利になるのか皆様の関心のあるところだと思いますので、システム設計の概略に加えて稼働当初の運用面での展開について述べます。

* * *

「全蔵書の所在管理」

現在北大には約 240 万冊の蔵書があります。これらは全て利用者全員のためのものです。そのことを現実のものにするには「所在」を常に明確にしておくことが必要です。

全ての蔵書に所在に関する情報を常に最新の状態で維持管理しオンラインで提供すること、これが所在情報管理システムの目的です。

「所在情報」

蔵書の所在情報を利用への対応から見て次の三つのレベルに分けて把握します。

1. 書庫や閲覧室に配架されている状態・・・これは原則としてすぐに利用できるものです。検索したとき部局名と書庫や閲覧室名が表示されるようにします。
2. 教官客や研究室・資料室に長期に貸出されている状態・・・これは当該研究費等で購入し、そこでの研究活動に直接かかわるものとして在るのがほとんどです。このやや長期に固定的な所在のことを「研究室貸出」としてとらえ貸出冊数・期間等を「一般貸出」とは分けて対応します。これらは他の利用者がすぐに利用出来ない場合があります。それだけに従来にも増してしっかりした所在情報が必要とされています。教官室名・研究室名・資料室名等が表示されるようにします。
3. 学生や教職員あるいは他の図書館へ短期に「一般貸出」されている状態・・・返却されるまではほかの人は利用出来ません。期間を守ってもらい良く利用出来るようにするためにもこの「貸出・返却処理」情報は重要です。このレベルは従来他の図書館システムでの「閲覧業務の電算化」と言われていた範囲です。貸出中と表示されるようにします。

「簡略書誌ファイル」（所在情報管理のための簡略ファイル）

全蔵書の所在情報を管理するために資料の一点一点の所在を記録しておくものが必要です。これが「簡略書誌ファイル」です。これには全蔵書の「資料番号」のほかにそれぞれの「所在情報」などを入れる項目が付きます。番号だけによる所在情報管理たとえば番号だけによる貸出・返却処理は可能ですしその例もあります。

しかし、たとえば貸出中の図書をリストにしたときを考えてみますと、ごく簡略なものであっても書名や著者名があったほうが便利です。したがって、このシステムでは資料番号とその所在情報に加えて更に「30文字以内の書名・巻号・著者名等（簡略書誌）」「分類記号」「配架記号」などを入れることができるようにしました。もちろん最初から全部入っているわけではありません。それでも当初（昭和61年5月予定）から閲覧業務を電算化する附属図書館本館と

教養分館の開架閲覧室の資料約10万冊、同じく本館・分館の製本雑誌の内約10万冊、あわせて約20万冊については初期データとして簡略書誌等を入れました。これはよく利用されるもので利用頻度から見るとかなりの割合を占めることになります。

そのほかの資料番号には今のところ「所在未登録」というデータが付いているだけです。稼働後の新しい受入資料については「図書管理システム」によって作成した詳細な書誌から自動的にその一部が「簡略書誌」として流れてくる仕組みになっています。また以前の資料についてはオンラインで比較的簡単に登録や修正ができますので、簡略書誌データはかなり増えていくと思います。ただしこのファイルは所在情報の基礎となっていますが、その内容を直接検索することはできません。

「図書・雑誌/DB」(検索できる詳細な蔵書ファイル)

的確なオンライン検索ができるようにするには正確で詳細な目録作業をして、それに検索語を付けたリ索引ファイルを作ったりしなければなりません。こうして作られるのが「図書・雑誌/DB」ですシステム稼働後に蔵書となるものの書誌データは全てこれに入ります。いまある蔵書も「図書管理システム」によって目録を作りなおすとこれに入り検索の対象になります。北大の全蔵書約240万冊の詳細なデータが全部入る大きさを用意しています。

「オンライン蔵書検索」

昭和61年度から蔵書となったものは、各図書室等に備え付けてある「利用者用端末機」で全学どこのものも検索できます。「検索語」としては著者や書名・誌名あるいは書名・誌名中の単語などのどれをどの順序で入れても構いません。図書と雑誌の区分や和書・洋書の区別も必要ありません。和資料であればカナで、それ以外はアルファベットでタイプして送信キーを押すと全データを一気に検索し結果をディスプレイに表示します。

「遡及データ」

以前のものは従来通りカード目録で見ることになります。カード目録のデータを全て入れるのは、100年かけた仕事をもう一度やりなおすことで大変です。それでもなお少しでも多く入っていたほうがよいことは言うまでもありません。そこで利用者からの要求の強い雑誌についてのデータを入力することを第一期計画としています。全学に所蔵する和洋雑誌の誌名とその所蔵巻号表示、先に述べた図書館・分館の約10万冊については製本単位までのデータ、そして新着状況についても当初は業務用ですが利用者検索端末からも見られるように計画中です。

「閲覧業務」

1. 貸出・返却

附属図書館開架閲覧室と教養分館開架閲覧室の図書の貸出・返却処理業務を昭和61年5月から電算化する予定です。

利用者 OCR ラベルの数字(利用者番号)と図書ラベルの数字(資料番号)を OCR スキャナー(光学文学読取装置)で読み記録する方法です。

数字を手で入力する方法であれば、システム稼働と同時に「一般貸出」業務の電算機処理を全学的に行うことが可能ですが、正確で効率的な処理をするには利用度の高い資料だけでも OCR ラベルを貼っておくなどの事前作業が必要です。本館・分館の開架閲覧室の図書約10万冊には貼り終わりましたがその他は貼ってありません。

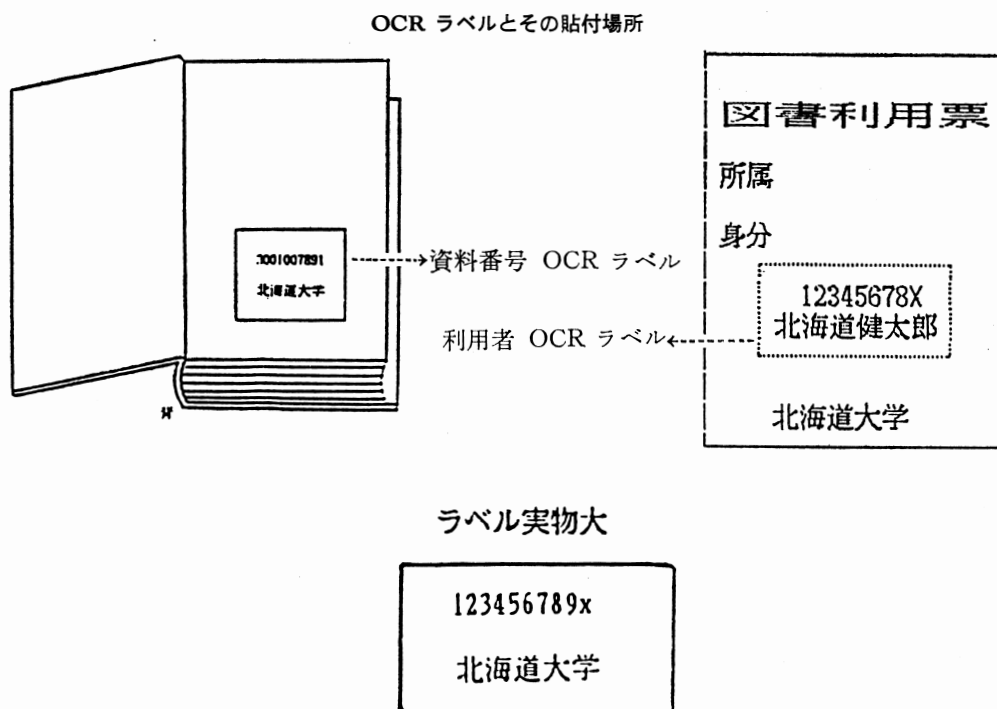
部局の書庫や閲覧室の「一般貸出」については昭和62年4月以降の実施を検討するということにしています。

部局で目録作業が済んでそのまま当該研究室等へ配架される「研究室貸出」は目録管理シ

システム稼働と同時に全学的に行われることになります。

2. 図書利用票

附属図書館または教養分館で本を借りるには、利用者OCR ラベルの貼った図書利用票が必要です。図書利用票は教官・職員の場合は所属部局の図書(担当)掛が発行しますのでそれを持って来てください。学生(教養部学生・学部学生・大学院学生)の場合は、学生部の協力を得て事務局の電算機で学生証を作成する時に OCR 用の数字を印字してもらっていますので、今まで通り学生証を携行してもらえばよいことになります。ただし、返却期限が切れて図書館が督促をする時には住所や電話番号が必要です。初回貸出時に用紙に記入してもらいます。



3. 貸出条件

全学共有の蔵書は全構成員が等しく利用することができるという基本に立って、全学共通に適用する「オンライン貸出申し合わせ」(案)によりたいと考えています。

「一般貸出」の制限冊数・日数は身分によって違います。貸出するときに貸出条件を越えるか否かのチェックをします。違反する場合は貸出せません。

「研究室貸出」は、それを購入した当該予算の教官・研究室等が対象ですのでその部局によって違ってくると思います。

4. 貸出図書問い合わせ・予約

利用者が利用者端末機で検索したとき、「一般貸出」で貸出中になっている図書は「貸出中」という表示が出ます。職員だけが使う業務用端末では利用者番号からその利用者の貸出状

況を確認することができます。また資料番号からその図書の貸出状況を確認することもできます。利用者の希望があれば貸出中の図書についての予約も記録しておけます。「研究室貸出」で貸出中になっている図書には、研究室を貸出している名称が資料の配架場所を表示する位置にでできます。これらによって利用者は最新の所在情報を知ることができます。

5. 督促

返却期限日を指定してそれ以前に貸出した図書をリストアップします。貸出者所属部局別の氏名・書名入りリストは各部局等に掲示してもらう予定です。貸出中の図書の配架順リストもできます。当日の日付を指定すると今日現在の貸出リストとなり、インスペクション(在庫点検管理)の資料に使えます。

6. 研究室貸出/配架場所変更

「一般貸出」においては貸出のデータを貸出ファイルに次々と蓄積していきます。「研究室貸出」および「配架場所変更」は、簡略書誌ファイルに在るその図書の所在コードを書き換えるという方法で行います。これによって「配架」「研究室貸出」というかなり長期にわたって変更のないかつ膨大な件数の「所在情報」をそれ専用のファイルを作ることなしに常時把握できるわけです。

7. 研究室貸出図書リスト/配架場所単位図書リスト

教官・研究室や配架場所のコードを指定してそこにある図書のリスト作成も計画中です。こちらのリストは「図書/雑誌・DB」にある分はその詳細な書誌データが載ります。それ以外は簡略書誌がリストに載ります。将来はたとえば「**室図書一覧」とか「配架場所変更図書リスト」等としてかなり使い道が多いと思います。

8. 閲覧統計

年々続いている公的な統計に該当する項目は当初から組込まれています。処理部局単位と全学の集計リストが出ます。今後更に利用の実態を参照しサービス改善に役立つもののプログラムを開発していきたいと思っています。

9. BM 端末

これは持ち運びの出来る OCR 文字読み取り機器です。ある配架場所に行き図書の資料番号 OCR ラベルを全部読み取って来てコンピューター本体に接続し、蔵書ファイル及び貸出データと照合させとほぼ完全なインスペクション(蔵書点検)になります。OCR ラベルが貼ってあれば(手でキー入力もできます。)従来人手と時間がものすごくかかっていたインスペクションがあつという間にできるようになります。

* * *

すぐに便利になることもたくさんありますが、作業に踏み出したばかりのこともあります。データベースは情報蓄積量がものをいいますから機能の良さを理解してもらえても稼働後しばらくは便利さも括弧付きになるかと思っています。しかし土台となるシステム設計がしっかりしていれば年を追うごとに使い応えが増してくる筈です。その頃には当たりまえことになっていて取り立てて便利になったとは言われないかも知れません。それこそ我々がめざす便利な時代の当たりまえのものです。

(文責 宇野 弘 純)

◆ 会 議

第124回 図書館委員会

<と き 昭和60年12月4日(水)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 本学図書館の将来計画について
2. そ の 他

第85回 教養分館委員会

<と き 昭和61年1月21日(火)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和61年度教官指定図書の選定について
2. 教養分館利用内規について
3. そ の 他

図書担当掛長会議

<と き 昭和60年12月11日(水)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. オンラインシステムの運用開始時期について
2. 「北海道大学における図書業務電算化の体制に関する要項」の一部改正について
3. そ の 他

第59次国立七大学附属図書館協議会

昭和60年度の第59次国立七大学附属図書館協議会は、昭和60年11月14日(木)大阪大学の当番で大阪市において開催され、当館からは、館長、事務部長が出席した。議題等は、次のとおりである。

1. 文献情報センターネットワークサービスの進展と創設が予定される「学術情報センター」システムの整備状況に伴う各大学の対応について
2. 図書館業務電算化に伴う組織の変革とそれに対応する現職者の再教育について
3. 国立大学図書館協議会役員会の在り方について
4. ネットワーク接続後における各館の業務運用体制の確立について
5. 図書館予算の活性化について
6. 学術情報センターの設置(予定)と今後の学術情報システムの進展及びそれに制う学内体制の整備について
7. 1次資料購入費の確保方策の活性化について
8. 部課長の処遇について
9. そ の 他

◆ 電算化ニュース

「北海道大学における図書業務電算化の体制に関する要項」の改正について

本学における図書業務電算化推進のため、昭和59年6月25日「北海道大学における図書業務電算化の体制に関する要項」が制定され、「電算化委員会」並びに下部組織として「システム開発準備部会」及び「システム設計実施部会」が設置された。「電算化委員会」と「システム開発準備部会」は直ちに準備活動に入り、次いで60年度(61年3月から)電算機導入決定により60年5月に「システム設計実施部会」の委員が委嘱され、以来、業務電算化のための実質的活動が続けられてきた。

7月に機種決定、11月にシステムの基本設計が終了し、これにより準備部会は当初の目的である「システムの基本設計及び機種選定のための予備作業に当たる」との任務が終了したため、12月11日の全学図書(担当者)掛長会議並びに電算化委員会において解散が了承された。今後は、電算機導入によって全学的に生ずる各種運用上の問題点を具体的に検討して解決していくため、電算化委員会の下に「図書情報」、「雑誌情報」、「所在情報」の3つのシステム運用部会を新たに設置し、全学の図書担当職員の中から委員を委嘱して体制を強化するとの改正案が了承された。

なお、システム設計実施部会に、新たに教養分館の輪木閲覧掛長および同分館整理掛の加徳事務官の補充も了承され、2期計画にむけて更に設計作業を進めていくことになった。

改正された「要項」並びに各運用部会の委員は次のとおり。

北海道大学における図書業務電算化の体制に関する要項

(設 置)

1 北海道大学における図書業務の電算化を円滑に進めるため、図書業務電算化委員会(以下「電算化委員会」という。)を置き、電算化委員会にその業務を分担させるため次の部会を置く。

- (1) システム設計実施部会(以下「実施部会」という。)
- (2) 図書情報システム運用部会(以下「図書情報部会」という。)
- (3) 雑誌情報システム運用部会(以下「雑誌情報部会」という。)
- (4) 所在情報システム運用部会(以下「所在情報部会」という。)

(組 織)

2 前項に掲げる電算化委員会等の組織は次のとおりとする。

- (1) 電算化委員会は全学の図書系掛長以上の職にある者及びその他の者を以て組織し、館長が委嘱する。
- (2) 実施部会は全学の図書系職員のなかから館長が委嘱する者をもってあてる。
- (3) 図書情報、雑誌情報、所在情報の3部会は、別表1(省略)の文献情報センター利用者登録単位において当該業務を担当する図書系職員のなかから館長が委嘱する者をもってあてる。

(委員会の任務)

3 各委員会等の任務はそれぞれ次のとおりとする。

- (1) 電算化委員会
図書業務電算化に係わる基本方針の検討及び策定、部局間の連絡調整に当たる。
- (2) 実施部会
システム設計及び稼働に至るまでの諸準備に当たる。

(3) 図書情報部会

図書情報管理システムの運用に関連し、全学図書館・室の連絡調整に当たる。

(4) 雑誌情報部会

雑誌情報管理システムの運用に関連し、全学図書館・室の連絡調整に当たる。

(5) 所在情報部会

所在情報管理システムの運用に関連し、全学図書館・室の連絡調整に当たる。

(責 任 者)

- 4 電算化委員会は附属図書館事務部長が責任者となって会を運営し、整理課長、閲覧課長及び学術情報課長がこれを補佐する。実施部会の責任者は学術情報課長とし、図書館専門員がこれを補佐する。図書情報部会については整理課長、雑誌情報部会については学術情報課長、所在情報部会については閲覧課長をそれぞれ責任者とする。

(事 務)

- 5 この要項に定める委員会、実施部会にかんする事務は、附属図書館学術情報課が担当し、図書情報部会については整理課目録掛、雑誌情報部会については学術情報課学術情報掛、所在情報部会については閲覧課閲覧掛が担当する。

付 則

この要項は、昭和60年12月18日から施行する。

システム運用部会名簿

利 用 単 位	図 書 担 当	雑 誌 担 当	所 在 担 当
附 属 図 書 館 学 法 部 環 境 科 学 研 ス ラ ブ 研 究 セ ン タ ー	田 中 一 郎 (図)	高 砂 慶 (図)	宇 野 弘 純 (図)
教 養 分 館 教 養 部 言 語 文 化 部	加 徳 健 三 (分館)	高 崎 仁 雄 (分館)	輪 木 安 雄 (分館)
文 学 部	畠 山 輝 敏	伊 藤 美 保 子	高 橋 ツ ル
教 育 学 部	午 来 信 子	佐 口 英 二	村 上 豊
経 済 学 部	宮 丸 弘 子	新 関 教 子	岩 本 攻
理 学 部 研 触 媒 研	鎌 田 由 起 子 (理)	宇 野 洋 子 (理)	福 盛 田 勉 (理)
医 学 部 研 免 疫 研	高 橋 忠 明 (医)	東 重 俊 (医)	藤 島 隆 (医)
歯 学 部	斎 藤 寿 美 子	堅 田 政 孝	斎 藤 寿 美 子
薬 学 部 大 医 療 技 術 短	金 子 和 恵 (医短)	吉 田 恭 子 (医短)	宮 本 慶 子 (薬)
工 学 部 研 応 用 電 気 研	渡 部 文 夫 (工)	山 田 良 江 (工)	富 本 寿 子 (工)
農 学 部	武 田 靖 恵	紙 屋 国 男	坪 田 千 江 子
獣 医 学 部 研 低 温 研	矢 野 誠 (低)	関 幸 子 (低)	伊 藤 秀 治 (獣)
水 産 学 部	菊 池 健 二	南 部 万 亀 子	金 子 美 弥 子

第1回 雑誌情報システム運用部会

く と き 昭和61年1月10日(金)>

く と ころ 北海道大学附属図書館研修室>

部会の基本的性格と設置の目的について確認した後、当面の課題として、1. 検索語について 2. 外字の扱いについて 3. マニュアルの作成について、の3つを取上げ、グループに分かれ検討を始めた。この3つは、61年4月のシステム稼動前に結論を出す必要のある緊急の課題として取上げたが、システム運用に関わるその他の問題も逐次この部会で解決を図っていくこととした。なお、部会の最終的課題は、北大における雑誌の全情報のデータベース化である。

第1回 図書情報システム運用部会

く と き 昭和61年1月14日(火)>

く と ころ 北海道大学附属図書館研修室>

開会にあたり、佐藤整理課長より部会の発足経過等について報告があった。次いで、今後の当部会の在り方と、図書情報システムに関する当面の諸問題について種々討議の結果、次の4項目が当面の課題であることが了承された。

- ① 検索語付与の規程 ② 分類表の版採用
- ③ 特殊言語の取扱い ④ 目録関係の入力テスト及びマニュアル作成

この内、④については学術情報課と共同して実施すること、他の項目についても相互協力体制のもとにこれらの問題解決に最大の努力を払うことを確認した。

また、これらの課題解決のために、部会を円滑に運営し検討を進める方法として、部会を4グループにわけてこれらの検討に当たることになった。グループの役割分担に当たっては、各委員の希望等を考慮の上次回に諮られ決定することになったが、目録関係入力テスト班については急を要するので、畠山輝敏(文)、加徳健三(教養分館)、午来信子(教育)、の3氏を決定した。



電 算 化 準 備 記 録 (6)

昭和60年11月～61年1月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
60.11. 5	日本電気との定例打合せ会議 (第7回)	60.12.25	文献情報センター宛「閉域登録届」,「大学間コンピュータネットワーク加入・接続申請書」等提出
60.11. 5 ～6	第23回システム設計実施部会 (基本設計書の総検討)	61. 1. 6	機器搬入, 設置作業始まる。先ず本体関係機器の搬入, 設置が行われ, 以後2月一杯にかけ順次部局に端末設置。
60.11. 8	学情課全体で「設計書 共通編, 各編」の再検討	61. 1. 9	第28回システム設計実施部会
60.11.14	第4回システム開発準備部会並びにシステム設計実施部会	61. 1.10	第1回雑誌情報システム運用部会
60.11.15	日本電気との定例打合せ会議 (第8回)	61. 1.12 ～15	日本電気のOS担当SE, 機器調整のため来館
60.11.20	第1回所在情報担当者連絡会議	61. 1.14	第1回図書情報システム運用部会
60.11.20 ～22	文献情報センター主催「目録講習会」に目録掛より2名受講	61. 1.16	第29回システム設計実施部会
60.11.21	第24回システム設計実施部会	61. 1.21	第1回端末基本操作並びにカナタイプ講習会 (3日間)
60.11.27	第3回雑誌担当者連絡会議	61. 1.24	日本電気との定例打合せ会議 (第11回)
60.11.29	日本電気との定例打合せ会議 (第9回)	61. 1.24	日本電気のSE数名来館, 本格的な作業に着手
60.12. 5	第25回システム設計実施部会	61. 1.24	第2回端末基本操作並びにカナタイプ講習会 (3日間)
60.12. 5 ～6	文献情報センター目録システム講習会	61. 1.27 ～30	NTTとDDX接続工事
60.12.11	全学図書 (担当) 掛長会議並びに電算化委員会。システム開発準備部会の解散と, 図書情報, 雑誌情報, 所在情報のシステム運用部会の新設を了承	61. 1.29	第3回端末基本操作並びにカナタイプ講習会 (3日間)
60.12.12	第26回システム設計実施部会	61. 1.30	第30回システム設計実施部会
60.12.13	第4回雑誌担当者連絡会議		
60.12.19	第27回システム設計実施部会		
60.12.20	日本電気との定例打合せ会議 (第10回)		

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

〔本 館〕

○文 学 部

田 中 彰 (校注) 特命全権大使 米欧回覧実記 1-5 岩波 1985

○獣 医 学 部

伊 澤 久 夫 (共著) 水生動物医学 (上) 日本小動物獣医師会 1985

○大学院環境科学研究科

伊 藤 浩 司 (編) 環境調査・アセスメントのための北海道高等植物目録 I
たくぎん総合研究所 1985

◇ 人事往来 ◇

○図書館委員会委員

飯 田 正 一 (歯学部教授)

60. 12. 1 (再任)

~~~~~ お 知 ら せ ~~~~~

附属図書館(本館)開架閲覧室の休室について

閲覧業務の電算機処理の準備作業のため、3月3日(月)から3月22日(土)の期間本館開架閲覧室を休室します。

この期間中ご不便をかけることとなりますが、ご協力お願いします。なお、書庫、参考閲覧室、一般閲覧室、北方資料室は平常通り利用出来ます。

北海道大学附属図書館報 「櫛蔭」 (通巻68号)

1986年2月28日発行 発行人 松 川 衛

編集委員 遠 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 潔(経)
宇野洋子(理)

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北8条西5丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北3条東7丁目 電話代表 231-5560・5561